看護・介護職者がとらえる在日コリアン高齢者支援における特徴と困難感

李 錦純[1)]　西内 陽子[2)]　高橋 芙沙子[1)]

要　旨

【目的】

看護・介護職者がとらえる在宅要介護の在日コリアン高齢者支援における特徴および困難感について明らかにすることを目的とした。

【方法】

A県所在の在日コリアン高齢者支援を行っている通所介護事業所Bで勤務している看護職および介護職を対象に、個別に半構成的面接法によるインタビュー調査を実施した。得られた面接内容は逐語録に起こしてテキストデータとし、質的意味を損なわない範囲内で区切って抽出・コード化し、意味内容の類似性と相違性を比較しながら類型化し、抽象度を高めながらサブカテゴリー化およびカテゴリー化を進めた。本研究は、所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

研究協力者は看護職１名、介護職４名であった。分析の結果、５つのカテゴリーと12のサブカテゴリーが生成された。在宅要介護の在日コリアン高齢者の特徴として【世代交代による変化】、【特有の儒教規範】が抽出され、困難感として【認知症症状と母国語回帰の同時進行への対応】、【宿泊対応可能な介護施設の未整備】、【介護保険制度の理解不足】が抽出された。

【考察】

在日コリアンの日本在住歴が長期に及ぶにつれ、世代交代が進み、介護現場においても利用者の特徴に変化が表れている。施設志向の背景には独居や認知症、家族の疲弊、重症化ケースの増加が見受けられる。在日コリアン高齢者の特徴の変化に応じた柔軟な対応が求められるとともに、民族性に配慮した通所介護事業所と連携を図りつつ、状態悪化の際に円滑に入退所できる宿泊可能な介護施設の整備の必要性が示唆された。

キーワード：在日コリアン、要介護高齢者、介護保険サービス、困難感

１）兵庫県立大学看護学部　在宅看護学
２）兵庫県立大学大学院看護学研究科　看護学専攻博士前期課程　国際看護学専攻

Ⅰ．諸　言

2015年末の在留外国人統計によると、外国人登録者総数は2,232,189人であり、そのうち65歳以上の高齢者数は153,735人で6.9％を占める。国籍（出身地）別では、「韓国・朝鮮」籍高齢者（以下、在日コリアン高齢者）が約80％と圧倒的多数を占めている[1)]。外国人高齢者の増加に伴い、介護保険による要介護認定者数の増加も見込まれるが、在日外国人に関する介護保険統計は未整備であり、その実態は明らかではない[2)]。

在日外国人に対する介護保険制度の適用は、平成24年７月９日施行の住民台帳基本法の改正により、適法に３か月を越えて在留する外国人で住所を有する人となった。制度設計上は適用要件が緩和されたが、実際の介護保険サービス利用に関しては、様々な障壁が厳として存在していることが報告されている。

先行調査では、在日コリアン高齢者の介護保険サービス利用における特有の問題として、識字率の低さや経済的問題、生活習慣・文化的背景の相違、そして母国文化への回帰が示されている[3)]。在日コリアン高齢者を担当しているケアマネジャーへの調査では、家族との介護ニーズのズレや意思疎通の困難、サービスの受け入れ拒否のケースについて、対応困難を感じていた[4)]。

1998年の特定非営利活動促進法（NPO法）の制定により、在日コリアンの民族性に配慮した介護系NPO（Non-Profit Organization）が、在日コリアンの集住地域である関西地区を中心に活動を展開し始めた。介護職員は主に在日コリアン二世・三世であり、韓国語で対応したり、食事内容やレクリエーションに母国の生活文化を取り入れ、介護支援以外の文化的要素を含むサービスを提供している。このような介護系NPOを利用している在日コリアン高齢者に対し、現場で直接対応している看護・介護専門職が、文化的背景が異なる対象特性をどのようにとらえてケアを提供しているのか、その過程で生じる困難感とはどのようなものなのか、また困難事例への対応をどのように行っているのか等、ケア提供者に内在している思いや認識、葛藤に着目した研究はあまりみられない。

そこで本研究は、現在高齢化が顕著で、在日外国人の中でも象徴的な課題として表出している在日コリアン高齢者の介護現場において、直接ケアを提供している看護職・介護職を対象に、在日コリアン高齢者の特徴および、困難感の様相を明らかにすることを目的とした。

日本社会は、内なる国際化と高齢化の二つの現象に直面しており、在日外国人の高齢者介護をめぐる現象の本質と課題を提起しつつ、解決策を探究することが重要である。多文化共生社会を目指すにあたり、本研究が、在日外国人がかかえる介護問題を検討する上での基礎資料としての意義を有するものと考える。

Ⅱ．研究目的

在宅要介護の在日コリアン高齢者の介護支援について、直接ケアに携わっている看護・介護職がとらえている特徴および困難感について、明らかにする。

【用語の定義】

1）在日コリアン：「韓国」もしくは「朝鮮」国籍を有し、在留資格をもって日本に在留する在日韓国・朝鮮人とする。

2）在日コリアン高齢者：65歳以上の在日コリアンを指す。本研究では、第二次世界大戦前後に移住し、日本に長期在住している「オールドカマー（旧来外国人）」であり、「特別永住者」の在留資格を有する高齢者が主な対象である。

3）看護・介護職：本研究対象の看護・介護職は、在日コリアン二世および三世の者、もしくは日本人であっても在日コリアンの配偶者をもつ者である。よって、在日コリアン高齢者の親をもち、その民族性や文化的特性を継承し理解し得る者である。また、韓国語による会話が堪能な者と一部のみ可能な者とが含まれている。

Ⅲ．研究方法

１．研究デザイン

半構成的面接法を用いた質的記述的研究デザイン

２．研究協力施設および研究協力者

A県内に所在し、在日外国人の高齢者介護支援を

行っている、NPO法人通所介護事業所Bに勤務している看護職１名および、介護職４名の計５名。

※事業所Bは、以前には訪問介護事業および通所介護事業を行っていたが、現在は通所介護事業のみ。

３．データ収集方法

研究協力の同意が得られた看護職・介護職を対象に、インタビューガイドを用いた半構成的面接を個別に実施した。インタビューは研究協力者１名に対し１回、１時間程度とし、承諾を得た上でICレコーダーに録音した。インタビューガイドは、在日外国人の高齢者介護支援における特徴、文化的背景が異なる高齢者への支援を専門職の立場からどのようにとらえているか、支援の過程で生じている困難感の有無とその内容を含めた。

【インタビューガイド】

１）ケア提供において感じている特徴的なこと

２）在日コリアン高齢者の気質、価値観、考え方、生活習慣

３）ケアを実践するにあたり心がけていること

４）ケア提供にあたり、専門職として求められている資質

５）ケアを実践する中で、特に難しいと感じたこと、葛藤が生じた経験について

６）在日コリアン高齢者の介護支援における課題

４．データ分析方法

録音データを逐語録に起こし、テキストデータを作成した。各研究協力者より在日コリアン高齢者の特徴や困難に感じていることについて語っている記述を、質的意味を損なわない範囲内で区切って抽出の上コード化し、さらに意味内容の類似性と相違性を比較しながら類型化し、サブカテゴリー化を行った。さらにサブカテゴリーを内容別に類型化し、抽象度を高めてカテゴリー化した。要約やカテゴリー化等が適切に行われているかについて、共同研究者である在宅看護学、国際看護学分野の研究者および通所介護事業所Bの職員により討議を重ね、適宜スーパーバイズを得て、分析内容の信頼性および妥当性を高めていった。

５．研究期間

2016年３月10日～３月31日

Ⅳ．倫理的配慮

本研究は、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認を得て実施した。研究協力者には、研究概要および、研究協力は自由意思であること、プライバシーの保護、研究の公表について文書と口頭で説明を行い、同意書に署名を得て実施した。

Ⅴ．結　　果

研究協力者は、A県NPO法人通所介護事業所Bに勤務している看護職１名および介護職４名の計５名であった。分析結果について、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを＜　＞、研究協力者の語りをコード化のために切片化したものを「　」で表した。

５名の面接データを分析した結果、５つのカテゴリーと12のサブカテゴリーに分類された。カテゴリーおよびサブカテゴリー、各カテゴリーの代表的な語りについてコード化したものを表２に示した。

１．研究協力者の概要

研究協力者の概要について、表１に示した。研究協力者は、看護師１名が日本国籍、介護職（介護福祉士およ

表１　研究協力者の概要

研究協力者	年齢	性別	国　籍	職　　種	臨床経験年数
A	40代	女	日　本	看　護　師	10年
B	40代	女	韓　国	介護福祉士	10年
C	50代	女	韓　国	介護福祉士	15年
D	60代	女	韓　国	ホームヘルパー２級取得者	20年
E	30代	女	韓　国	ホームヘルパー２級取得者	２年

びホームヘルパー２級取得者）４名が韓国籍を有していた。看護師１名は、日本国籍ながら、韓国籍の夫と国際結婚しており、在日コリアンの民族性や文化的特性について、ある程度理解があった。また、韓国語は片言しか話せないものの、聞き取りは可能であった。介護職４名の内、３名が韓国語による会話が堪能であり、１名は日常会話程度であれば問題ないレベルであった。

２．在宅要介護の在日コリアン高齢者の特徴

看護職・介護職者がとらえた、在宅要介護の在日コリアン高齢者の特徴として、＜生活歴の相違＞、＜識字能力の差＞、＜サービス利用に対する権利意識の差＞で構成される【世代交代による変化】および、＜家父長制度に基づく家族意識＞、＜長幼の序を遵守＞で構成される【特有の儒教規範】が抽出された。

【世代交代による変化】は、旧植民地時代に朝鮮半島で出生し、日本へ移住した本国生まれの在日一世高齢者と、在日一世の子世代である日本生まれの在日二世高齢者との世代間で生じている変化であった。在日コリアンの日本在住歴が長期におよぶにつれ、時代の流れとともに在日二世も高齢化し、利用者層も日本生まれの在日二世へと移行する過程で、従来とは異なる特徴が浮き彫りになった。

世代交代による変化を示す語りとして、*「それこそ食べるものもない中で苦労して日本に住んでいらっしゃった方たちで、字も読めないし、書けないしという無学な*

表２　在日コリアン高齢者支援における特徴と困難感に関するカテゴリ一覧

カテゴリ	サブカテゴリ	コ　ー　ド
【世代交代による変化】	生活歴の相違	一世と二世では経験してきた生活歴が全く違う
		童謡ではなく演歌
		以前の気難しい在日一世の特色が薄まり日本人と共通する問題が多い
		スプーンの文化、日本人から行儀悪くとらえられる
		二世高齢者はプライバシーを大事にしており初対面では必要な生活歴を話してくれない
	識字能力の差	二世高齢者は歌詞カードを見て歌ったりかるたができる
		90代以上の方は無学で字も読めないが、負けず嫌いで気持ちが強い
		学校を出ている分理解力がありデイでやってみたいことが多く好奇心を持っている
		少し若い世代になると字も読めるし韓国語も聞き取れるが日本語が主流
	サービス利用に対する権利意識の差	在日一世は介護職を女中さんかお手伝いさんと勘違いしている
		今の利用者は介護保険認定結果に不服申し立てをするぐらい
		在日二世は自分の意見をしっかり持っている
		昭和初期以降生まれの方は保険制度をよく知っている
【特有の儒教規範】	家父長制度に基づく家族意識	特に女性は他人に世話になる習慣がなくサービス受け入れに遠慮がある
		在日一世は何といっても長男を重視
		長男への愛情が格別
		家族には自分の弱みを見せたくない
	長幼の序を遵守	食事の時も年上の方よりも先に箸をつけない
		在日社会の狭さ
		70歳になっても80歳になっても目上の人は目上、姉さんと呼び敬う
【認知症症状と母国語回帰の同時進行への対応】	母国語回帰による意思疎通困難	ハングルはわかっても方言が混じるとさすがに理解できない
		ハングルと方言とが出て来るともう歌でしか対応できない
	目が離せない	暴言・暴力が目立ってくると１対１の対応になり目が離せない
		医者嫌いで受診しない
		家族も困っているが受け入れ先がない
	勉強不足を自覚	緊急時対応含め介護職も初歩的な医療的知識を持っていないと対応できない
		認知症は十人十色で毎回症状が違うのでもっと勉強しなくてはいけない
【宿泊対応可能な介護施設の未整備】	通所介護の限界	デイサービスだけでは対応できない
		言葉の問題で一般の施設入所やショートステイは無理と言われる
		入退所がスムーズに担保できる小規模多機能とか、特養とかがあればよい
	在宅介護の限界	デイサービスは一時しかみれず介護する家族も限界がある
		本人も家族も安心できる施設を早く作ってほしい
【介護保険制度の理解不足】	サービス内容の理解不足	訪問介護が入る際に掃除して待っている
		ヘルパーと家政婦との境界がない
	保険システムの理解不足	何度説明しても、理解が得られない
		マイナスからの説明
		行政に頼ることへの抵抗感

方たちだけど、気持ちはとても負けず嫌いで強いものがある。(D氏)」、「*経験してきた生活歴が全く違う。(B氏)*」というような＜生活歴の相違＞や、「*一世の方がいらっしゃらないからか、もう皆さん日本語を全然普通に使っていらっしゃるんで、その辺は助かりますね。(A氏)*」、「*少し若い世代になると、文字も読める。日本語が主流だが韓国語も聞き取れる。考え方が若返っている。(C氏)*」といった＜識字能力の差＞、「*昭和初期の80代の初期の方たちって、介護保険のことを、もう今テレビ、ニュースなんかでもすごく言うでしょ。だからよく御存じなんですよ、保険制度を。(D氏)*」、「*今の（二世）利用者は介護保険認定結果に不服申し立てをするぐらいです。(E氏)*」といった＜サービス利用に対する権利意識の差＞が示された。

【特有の儒教規範】では、伝統的な儒教文化圏である朝鮮半島出身であることから、「*在日一世は何といっても長男第一。やっぱり長男に対しての愛情がね、お話しされていく中で、やっぱりすごい。(C氏)*」というような＜家父長制度に基づく家族意識＞や、「*高齢になっても年上は年上。利用者同士で『オンニ（姉さん）』と呼ぶ。(D氏)*」、「*食事の時、年上の人より先に箸をつけない。目上の方から差し上げている。(C氏)*」というような、＜長幼の序を遵守＞など、年長者を敬い礼節を重んじるという文化の継承が、特徴として見受けられた。

3．ケア提供上の困難感

在宅要介護の在日コリアン高齢者のケアを実践する上で看護・介護職が感じている困難感として、＜母国語回帰による意思疎通困難＞、＜目が離せない＞、＜勉強不足を自覚＞より構成された【認知症症状と母国語回帰の同時進行への対応】、そして＜通所介護の限界＞、＜在宅介護の限界＞からなる【宿泊可能な介護施設の未整備】、さらに＜サービス内容の理解不足＞、＜保険システムの理解不足＞から構成される【介護保険制度の理解不足】が抽出された。

【認知症症状と母国語回帰の同時進行への対応】として、「*認知症の方の受け答えも韓国語ですしね。方言も出てきますし。そういう時は歌で対応するしかない。(A氏)*」という語りにあるように、認知症の症状進行により、日本語よりも母国語である韓国語の比重が高くなり、さらに方言が加わることで、意思疎通に困難を来している状況がうかがえた。

また、「*難しいですよ、やっぱり。おとなしい認知症もいれば、暴力的な認知症っていますよね。ふっと画面が変わるときがあるんです。(D氏)*」という＜目が離せない＞状況に置かれることから、個別性が大きい認知症の病状や対応に関して、「*認知の方の状態をもっともっと勉強していかないと、いろんな症状が本当に十人十色じゃないですか。(C氏)*」といった＜勉強不足を自覚＞していた。

【宿泊可能な介護施設の未整備】では、「*デイサービスは一時しかみられず介護する家族も限界がある。かと言って、一般の施設では馴染めない方もいる。(B氏)*」、「*入退所がスムーズに担保できる小規模多機能とか、特養とかがあればよい。デイだけでは対応できない。(E氏)*」といった＜通所介護の限界＞および＜在宅介護の限界＞について、看護・介護職が日頃の関わりから感じている様子がうかがえた。

さらに、認知症の進行による言葉の問題から派生して、「*デイサービスというのは、あくまでも通過点にしかすぎないので、最終、特養とかの施設、または介護つき有料老人ホームとか、高専賃（高齢者専用賃貸住宅）でもいいんですよ。やっぱりコリアンが主としたそういう施設が欲しいです。(B氏)*」、「*こっちはケアマネに発信しているんですよ、家族も大変ですから。お願いですからショートをそろそろ使っていただけませんかって。それを在日だからといって、在日語（韓国語＋方言）が出てくるからって日本の施設は無理やと（言われる）。(C氏)*」とあるように、緊急時や状態悪化、家族介護者の疲弊が限界に達した際に、在日コリアンの民族性に配慮し対応可能な入所施設が整備されていない現状が困難感として示された。

【介護保険制度の理解不足】では、「*介護保険を使ってヘルパーに入っていても、女中じゃないんやけどもう何でもしてくれるというイメージを持っている人もいてるんで、それを説明してもやっぱりわかってもらえないんです。(E氏)*」といった＜サービス内容の理解不足＞や、「*できるだけ精いっぱい頑張るから、日本の行政の力をかりるのは嫌だと言う。だから、訪問とかに来たら、来るまでに自分が片づけとかなあかんって言う。(D氏)*」、

*「こういう（介護保険）制度がなかったんで、人に頼るということが性格上やっぱり不器用でできない人も多い。（B氏）」*というように、＜保険システムの理解不足＞が見受けられ、現行の介護保険制度および居宅介護サービスの内容に関して、理解を促すことの難しさも示された。

Ⅵ．考　　察

看護・介護職がケアを実践する中でとらえている在日コリアン高齢者の特徴と困難感について、①在宅要介護の在日コリアン高齢者の特徴と現状、②看護職・介護職がとらえるケア提供上の困難感という２つの観点から考察した。

１．在宅要介護の在日コリアン高齢者の特徴と現状

在宅要介護の在日コリアン高齢者の特徴として、【世代交代による変化】と【特有の儒教規範】が示された。在日コリアンの形成過程の歴史的経緯として、①生活破綻が主因の渡航（1910～39年；１期）、その要因も加えた上での強制連行による渡航（1939～45年；２期）、終戦後の渡航（1945年～；３期）と大別する見方がある[5]。1910年の日韓併合から数えて、在日コリアンの歴史は100年以上におよび、その大半が第二次世界大戦前後に移住した人々とその子孫である。

朝鮮半島生まれの在日一世は90歳以上になり、その子世代がすでに70～80歳代に達している。また、同じ在日一世でも渡航年代や渡航時の年齢は個人によって様々であり、乳児期・幼少期あるいは思春期・青年期以降の渡航によっても、その時代背景に伴う生活歴は異なってくる。さらに、法務省による帰化許可者数の推移をみると、1952年以降で累計35万人以上におよんでおり[6]、朝鮮半島にルーツを持ちながら、国籍自体は日本、韓国、朝鮮と多様な現状がある。

本研究結果において、通所介護サービス利用者層の世代交代が進み、在日一世の高齢者のように識字能力に不足はなく、レクリエーション等も自ら好みのものを選択し、主体的にサービスを利用していることが明らかになった。それでいて、在日一世の親から母国の生活文化や言葉を継承しており、高齢者本人の意向に沿うケアをどのように展開すべきかを個別ケースで臨機応変に対応している現状があった。

移民の二世・三世はふたつの文化からなる背景をもっており、文化のハイブリッド化を進めるために重要な役割を果たす可能性があるものの、この対象への関心の低さが指摘されている[7]。在日コリアンはもとより、永住者の在留資格をもつ他国出身の在日外国人も長期在住とともに高齢化し、「老いの多様化」が進むと予測される。世代交代が進む中で、その特性をふまえつつ、介護保険制度の基本的な理念である、自由なサービスの選択と自己決定を尊重したケアのあり方について、個別事例の分析と蓄積に基づき検討を重ねていく必要があると考える。

２．看護職・介護職がとらえるケア提供上の困難感

在宅要介護の在日コリアン高齢者への支援における困難感の内容として、認知症症状と母国語回帰の同時進行への対応の難しさや介護保険サービスの理解不足が示され、さらに、宿泊可能な介護施設への強い要望が示された。

認知症の進行により、日本語よりも母国語である韓国・朝鮮語の比重が高くなり、さらに方言が加わって、ケア提供者や家族との意思疎通が困難になっている現状が見受けられた。認知症は中核症状に加え、周辺症状による周囲の人々への影響が大きく、家族の精神的、身体的介護負担も他の疾患と比較し大きいといわれている[8]。在日コリアン高齢者の場合、上述のように言葉の問題も加わるため、韓国・朝鮮語を話せる看護・介護職でも認知症対応に苦慮している。

金[9]は、在日コリアンの認知症高齢者の介護支援について、認知症の理解、異文化の理解、生活支援、施設の変化という４つのカテゴリーで示し、認知症になっても民族性が個性として発揮されることから、個性を尊重した介護の重要性を述べている。認知症という疾患と症状、そして民族性を個性としてとらえる適切な対応方法の習得は、介護職にとっても大きな課題と認識されている。介護職および家族を対象とした研修や事例検討等の学習機会の提供が、支援体制として求められるだろう。

宿泊対応が可能な介護施設とは、認知症その他疾患をもつ利用者が、状態悪化の際に円滑に入退所ができる施設を指し、ショートステイや小規模多機能型居宅介護に対する要望が語られた。本研究対象の事業所Bは、現在、通所介護事業のみの展開であり、宿泊対応ができる介護施設の併設や密な連携がない。特に認知症の場合、通所介護のみでは言葉の問題から一般的な特別養護老人ホームでは受け入れが難しいケースが生じており、民族性に配慮した通所介護事業所と連携した施設整備など、早急な対応体制の構築が課題である。

Ⅶ. 結　論

在宅要介護の在日コリアン高齢者支援における特徴および困難感について明らかにすることを目的として、A県の在日コリアン高齢者支援を行っている通所介護事業所Bに勤務している看護職および介護職を対象に、インタビュー調査を行った。在宅要介護の在日コリアン高齢者の特徴として【世代交代による変化】、【特有の儒教規範】が抽出され、困難感として【認知症症状と母国語回帰の同時進行への対応】、【宿泊対応可能な介護施設の未整備】、【介護保険制度の理解不足】が抽出された。

結果から、在日コリアン高齢者の世代交代等の変化に応じた柔軟な対応が求められるとともに、民族性に配慮した通所介護事業所と連携を図りつつ、状態悪化の際に円滑に入退所できる宿泊可能な介護施設の整備の必要性が示唆された。

Ⅷ. 本研究の限界

本研究は、A県NPO法人通所介護事業所Bの１施設における看護職・介護職のみを対象としており、一般化の可能性は保証できない。また、看護職・介護職の年齢や臨床経験年数は様々であり、それぞれが感じている困難感や、利用者である在日コリアン高齢者の特徴の捉え方も異なるものと思われる。しかしながら、看護・介護職が実際の関わりからとらえている特徴と困難感の様相について明らかにした点で、課題解決に向けての基礎資料として、意義を有するものと思われる。

謝　辞

ご多忙の中、本研究に快くご協力くださいました、NPO法人通所介護事業所Bの理事長並びに看護職・介護職の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

本研究は、2012～2015年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C：課題番号24593548）を得て実施した。

本研究の一部は、The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars（EAFONS）にて発表予定である。

引　用　文　献

1）在留外国人統計，2015年12月末，法務省．

2）李　錦純．在日外国人の高齢者保健福祉の現状と課題－在日コリアンに着目して－．近大姫路大学看護学部紀要第５号，2013，１-９．

3）丸井英二・森口育子・李　節子編著，李　錦純他．（分担）第４章日本における外国人　Ⅴ．在日外国人の高齢者看護．東京．弘文堂，2012，153-160．（ISBN 4335760167）

4）李　錦純．在日外国人の介護保険利用状況に関する実証的研究－在宅要介護の在日コリアン高齢者の生活実態とケアマネジメントに焦点を当てて－．公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団完了報告書，2010．

5）金　正根，園田恭一他．在日韓国・朝鮮人の健康・生活・意識－人口集団の静態と動態をめぐって－．東京．明石書店，1995．（ISBN 4750306894）

6）法務省民事局．帰化許可申請者数，帰化許可者数及び帰化不許可者数の推移．（オンライン），入手先＜http://www.moj.go.jp/content/001180510.pdf＞，（参照2016-10-20）．

7）駒井　洋．日本における移民研究の成果と課題．移民政策研究，Vol 6，2014，219-233．

8）樣　直美，尾形由起子他．家族介護者の介護力構成要素と介護負担感との関連．福岡県立大学看護学研究紀要，11⑵，2014，35-44．

9）金　春男．在日コリアン認知症高齢者への介護支援に関する研究－施設における「ケアワーカー」フォーカス・グループインタビューを通じて－．社会問題研究．54⑴)，2004，39-60．

Characteristics and Difficulties of Support for Korean Elderly Living in Japan Perceived by Nurse and Care Workers

LEE Kumsun[1)], NISHIUCHI Yoko[2)], TAKAHASHI Fusako[1)]

Abstract

Purpose

This study aims to clarify how nurse and care worker members perceived the characteristics and difficulties of support for the Korean elderly living in Japan who need long-term care.

Methods

We conducted a semi-structured interview with an individual nurse and care worker who work at B day service center for supporting the Korean elderly living in A prefecture. After being saved as text data recorded as verbatim records, the obtained results were extracted and encoded as the divided length which does not affect content quality. We classified them in accordance with the similarity and dissimilarity of the content and categorized and subcategorized them while going up the levels of abstraction. This study was approved by a research ethics committee at the affiliated institution.

Results

Subjects were one nurse and 4 care workers. As results, the analyzed data were classified into 5 categories and 12 subcategories. "Changes due to generational replacement" and "The Confucian norms found uniquely in the Korean elderly" were extracted as the characteristics of the Korean elderly residents of Japan. In terms of the difficulties of support, "Correspondence to simultaneous progression of dementia symptoms and regression to a primary language," "The Korean elderly insufficiently understand the long-term care insurance," and "Long-term care facilities have been undeveloped" were extracted.

Discussion

While the Korean prolongs their residence in Japan, their generational replacement is progressing, and the characteristics of users of day care centers are also shifting in nursing practice. Their tendency to prefer day service centers seems to be due to increases in elderly living alone, those with dementia, poor-quality family relationships, and disease aggravation. Our results indicated the following necessities : flexibility in response to changes in the characteristics of the Korean elderly living in Japan, close communication with day service centers in consideration of ethnicity, and development of long-term care facilities where they can be smoothly placed in or discharged from in case that situation deteriorates.

Key words : Korean living in Japan ; frail elderly ; long-term care insurance service ; difficulty

1) Home Care Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo
2) Graduate School of Nursing Art and Science, University of Hyogo